に書初の年頭を、親類に贈ると言ふし、ゴボサと土地の言葉でよぶ盲人は、やはり二日にテシボウを語つて年頭にしたと言ふ。同じ町では、お寺さんが正月に「××寺お年頭」と言つて。切餅に箸十膳を添へて檀家へ配る。お年頭は元來は年始と同じ語であらう。

四八　年夜の行事

カケトリ　大晦日は一年中の勘定日で、商人は掛取に十二時過までもかけまはる。元日から七日迄は、取りに來てもやらず、却つて理屈を言ふ位で、決め事も、お松が下つてからにするのが一般であつた。從つて、大晦日に清算が出來ぬと小年バライにする。

トシトリゼン　年夜の食事を、西海●今井では、年取膳と言つて、年長の者から赤子の末まで一人前づゝ据ゑる。西海では、オヒラ●燒物●刺身●數の子●干鰯の炒附等が載せられると言ふ。茶の間に出て、神棚の下で、家族揃うて膳につくのが全般の風である。西海では、年祝の酒を、家族が順次に汲み、戸主は「永劫末代まで、まめ息災で暮してくれ」と言ふ。名立谷には、主人の名と萬歳を、妻女以下嫁女まで言つてから、箸を取る家があると言つた。浦本では、此の年取ノ膳を舟へも供へる。

トシトリザカナ　根知●上早川では、鰤を年取魚と言つて、是が無ければ、年が取れないやうに言つたが、今は他の魚で我慢するやうになつた。

ミソカソバ　家族一同風呂にはいり、着物をさつぱりしたものに代へて、家の神佛に參り、もうお晝頃、年取の夕食をすます所が多い。そして夜は、夜食として、ミソカ蕎麥を食ひ、早寢をすると、年がよると言つて、長起をする例は、上早川●根知から報ぜられて居る。今井でも、神棚のあかりの消えぬ中は、睡つてはならぬと言ふ。磯部の奥では、年取の神さんは、寢て居る人には、年が一つ餘つたからとて、二つくれるから、早く寢てはならんと說明して居る。

フクノカミ　今井では、福の神●年の神が入る樣にと、大戸から土藏の戸まで、年夜には開けて置く。良い木種を選んで、棟木の見える程の、大きな火を焚くのも、福の神の入る爲と、やはり今井では言ふ。上路●下早川●根知も、福の神を迎へる爲に、大戸を開けて置く。糸魚川●根知●下早川でも、大火を焚くが、理由は知らないらしい。

ウシウマノトシトリ　今井●西海では、豆●麥●餅●米なぎを煮て、馬に年を取らせる。下早川では、何歲の馬にでも、年取の晩、御馳走を食はせる時「今年はわれ（汝）や五歲だぞ。はりこんで働け」と言ふ。五歲とは、働き盛りを意味すると言つた。根知では、此夜馬を早く飼ふと馬が早く年寄りになると言つた。西海では、雞にも白米を與へて年を取らせる。

ネズミノトシトリ　鼠に年を取らせる風は、方々にあるが、大和川では、御飯と蝦魚二匹とを

お膳にあげ、「今日は年取だぞ」と言つておいて來る。西海では、家人同樣の食物をやるが、蒟蒻だけは、鼠が嫌だからと言つてやらない。根知では、御膳に米を載せて、鼠の出さうな所に、方々供へて、「スマノアネサ、今日年取だそい、年を取つてくらさい」と言ふ。鼠と言ふのを忌んで、隅ノ姉サと言ふのであるが、年を取らせると、惡戲をしないと言ふ。

ドウグノトシトリ　鍬●鎌●鋸●斧等の道具を、神棚や床の間において、供物をし、其他臼●鍋などにも、年を取らせると、今井では言つた。仙納の道具ノ年取は、正月十四日で、若餅のフクデを、床の間で、桝やチギや鍬などに、供へるのである。

セイボマイリ　西海の一部では、年取の夕食前に、氏神へ歲暮參りに行き、一年間無事であつた事の御禮參りをする。所が、根知●浦本では、年取の夜と元日の朝と、二度宮參りをすると言ふ。元日の朝だけの所も多いやうである。

オコモリ　年夜から元日まで、宮に御籠をする所も、糸魚川●木浦その他に多い。能生谷は年男、下早川は若い衆、西海の市野々は家族全部お籠をした。大野では、大晦日に各戸へ大麻が納められ、宮では大年ノ祓をし、引續き若者のお籠がある。大野では、お籠に行つてバクチ、糸魚川では、男は宿でチボタマ、女は寶引をしたが、是は昔の風であつた。

コウリトリ　大和川の田伏では、年夜に氏神に集り、除夜の鐘と共に、素裸になつて、各氏子の釣瓶井戸を巡り、頭から三杯づゝ水を浴びて、氏神様に合掌する。かうすると不思議にも、其年は風邪を引かないとて、盛にする。此の垢離取の人々は、巡る道中で、俗人にあふ事を、ひどく嫌ふと言ふ。

ヤクヨケ　年夜前後に、厄年の者は、色々の作法で厄除をした。今井では、年男になる。西海では、年夜に宮のお籠をする。大野では、氏神に御神酒一升を上げて、大祓に厄除をしてもらふ。浦本では、一臼餅のフクデと神酒とを、氏神に供へる。同じ所には、海水を浴びて、垢離をとり、裸になつて参り、途中で女に會ふと、垢離をとり直す向もある。根知の字山寺では、元日に冷水三杯をかぶり、裸参りをする。糸魚川の寺町では、二十五の厄年の者は、元日の宮参りの歸りに、手拭など人知れず落して來ると言ふ。浦本・西海には除夜の鐘つきもする。

四九　各種の講

コウシンコウ　高谷根には、庚申講が一組ある。六十日目毎に、廻り宿で、お祭を行ひ、六年目には、角塔婆を立てゝ供養し、祝をする。名立谷には、神主から來て貰つて、庚申様を祀り、火災豫防の爲に、すつかり爐の火を消し、新たに火を起す式があると言ふが、次の秋葉講に類するものであらう。

アキワコウ　青海町の字青海には、秋葉講なるものが、昔は六組、今は十四組程ある。年三回二月十六日・七月二十四日・十二月十六日に、廻り宿に講仲間が集つて、火事の祭をする。宿の表には、「秋葉神社御祭禮」とか、「秋葉招奉大神」とかの幟を立てる。宿の中には、遠州秋葉さんから受けて來た、「正一位秋葉神社」の掛字や、字札を祀る。昔は一回に五錢位、今は二十錢位の費用を持寄るが、餘つた金は不時の火災見舞などに用ゐる。

オコウサン　上路では、毎月二回位づゝ、村のお道場に集つて、爺さん婆さん別のオ講サンがある。當番の者が、野菜を講仲間から集めて料理し、當日振舞ふのである。一年に一度は、男若

イ衆オ講●女若イ衆オ講も、此のお道場で行はれる。根知でも、各部落のお道場で、オ講様が行はれ、オカイバンと言つて、毎朝お道場の佛壇に、御飯を供へる番が巡る。

オヨリコウ　能生谷の東谷内には、昔毎月二十八日の御開山様の命日に、オ寄リ講といふものがあつた。夕飯後老人達が集つて、豆炒を食べながら、御相續話といつて、信仰の話をし、お經を上げるのであつた。今はすつかりなくなつて居ると言ふ。

アミダコウ　糸魚川の蓮臺寺部落では、四月十八日に阿彌陀講を行ふ。部落の釋迦堂に、米五合を持寄つて、お經を上げて貰ふのである。合社の爲、神さんが多すぎて、出し申した記念日でもあると言ふが、詳細はわからない。

カンノンコウ　筒石では、毎月の十八日の夕には、觀音堂參りをする。部落の觀音堂に讀經があり、村の老若男女が參詣するのであるが、出漁の都合によつては、延期する事もある。

五〇　其他の行事

カンネンブツ　能生谷の高倉では、寒三十日間、寒念佛と言ふ事をする。親や子の死んだ家では、三年間行ふのである。村中鉦を叩き、念佛を唱へて廻り、その家の墓へ參るのである。此の念佛に出る時は、言葉を交はしてはならぬが、念佛から歸つてはよい。

ヒトガタバライ　糸魚川の寺町では、六月三十日の大祓には、人形祓と言ふ事をする。白紙で人形（ひとがた）を切り、是に各人が息をかけて、神に上げ、祓をしてもらふ。かうすると、厄拂になるのである。

ソウヒマチ　能生谷の往道では、新の七月二十六日を、總日待と言ひ、村中全部の者が、夜詣訪神社に集り、神酒を供へて、病魔降伏●家内安全を祈ると言ふ。

マノマツリ　能生谷の大澤では、十月の最初の午の日に、お宮で祭をすると言ふ。此のマノ祭の意味由來は、聞く事が出來なかつた。

ミイワイ　小瀧では、十二月の巳の日に、蕎麥を拵へて、神様に上げるが、何の意味かは明ら

かにされて居ない。糸魚川の寺町では、巳祝は、酒屋で巳の神を祀る事で、年夜と春季皇靈祭の日と、新嘗祭との三回行ふ。巳の神は、食の神であり、井戸の神であると言ふ。所の氏神天津神社へ、二十五膳の供物を上げる。御飯●餅●姫川産の鮭の切身●生大根に昆布等を供へるのである。餅は楕圓形の平たいもの、御飯は昔は蒸飯であつた。

採訪記その他

青木・重孝

七月十七日　西頸城郡の同志諸賢の年中行事調査報告は、昭和十二年の暮には、もう自分の手許に屆けられたのであるが、自らも少し當つてみたいと思ひつゝ、腰をきる決意をする迄に、空しく二年を送つてしまつた。愈〻採訪期間を約二週間とし、十數ヶ所の部落を選んで、其地の小學校長に、傳承者の紹介を依頼する。

七月二十六日　晴。五日間の夏季集團勤勞作業の指導を終へて、夕刻佐渡の寓居を出發、七里の道を自動車に搖られて小木港へ出る。

七月二十七日　晴。深夜一時小木港出帆、五時直江津上陸、八時西頸城郡梶屋敷驛下車、山崎鄕土研究會長に會ふ。直に浦本村に向ふ。

田代德治郎氏〔五二〕　沼屋よしのさんからみたてゝもらつた人で、蟹網のつくろひはして居たが、氣も姿もガツチリした船頭さんであつた。佐渡の水津港に四年も居て蟹捕りを敎へてやつた事から話は始つた。門徒であつたが、仲人婆さんが、神棚をちやんとして居るとて、嫁の世話を、その昔うまくしてくれた人だけあつて、海の方の行事はくはしかつた。一口毎に「言うてみりや」といふ言葉を、相の手のやうに入れるのも、古風で嬉しいことであつた。

中食。浦本濱の廐釜の壯觀をみて、バスで木浦村に向ふ。放課後の小學校を訪ひ、若井校長の好意で、山木浦の中尾部落に至る。

神谷善松氏〔五五〕　木浦校の岩崎先省吾生にお氣の毒を願つた、此の村でのもつとも奥の中尾（なかお）部落の農人であつた。三郎ヘエの爺さが居ればと、答につまる度になげいてくれた。ゐろりから見えるナガシの清水は、此の家の自慢で、自分なども遂一ぱい戴かせられてしまつた。禪宗でねつい方の家であつたが、もうおひ〳〵じたらくになつたと、本人も言ふ程に、行事作法も自滅へ進んで居たのは悲しかつた。

夕刻能生町に出、菊屋に泊る。夜鈴木能生校長紹介の岡本氏を訪ふ。

岡本周治氏〔六〇〕　お茶屋さんで、母者人の柄の太い、一寸片手では持ちあがらぬ程の鏡を出して見せたり、ヘーナサマ（雛樣）の昔の調度なども、ちやんとしまつて置く程の人であつた。門徒であつたことと、青少年の頃を他鄕で送つたことが、此の人に多くを語らせなかつた。おかみさんも坐つて、時々助太刀を出してくれたのは嬉しかつた。然し、此の町のせいとみえて、やはり年中行事は豐富ではなかつたが、「佐渡は雨垂に魚が棲む」などと、うまい話をする人であつた。

七月二十八日　晴。バスで能生谷村に向ふ。中能生校富田校長の斡旋をうける。

笠原平吉氏〔七四〕　中能生校蒐集の此の村の年中行事は、誠に詳しく立派であつた。自分のこゝまで來た事は、本當に御足勞となつてしまつた。然しまあ〳〵と言ふので、笠原老と齋藤先生の御引合せであふ。元氣な老人で、百姓をして居ても食つて行けぬとて、土方になり、手車

引になり、植木屋になつて、旅を知つて居るだけに、話は至極面白かつたが、子供の行事にだけ精しい人であつた。その上門徒であつた事は、やはり詮もない。

午後下早川村へ急ぐ。山崎鄉土研究會長と同行、下早川校丸山校長を訪ひ、日暮れて高谷根部落に至る。小藥正先生と同道。

渡邊角次郎氏〔八一〕　渡邊マツケの長老だが、まだ肉附のよい體で、もう十年は少くとも生きると言つて居た。老の本家である渡邊貢氏御一家の好意で、心おきなく老の口を開かせてくれたのは、初からの幸であつた。あひのくさびに少々變つた話を私が持出す度に、「はてね」と首を振つて驚くのは、此の老の嬉しい口癖であつた。じたらくになつて、もう粗相になつたがと言つて、翌日、自作のハナバシを持つて來てくれたが、よいお土産であつた。ひげをそり、着物を着かへて來た程のはりこみは、次の朝きいて、この爺さんの元氣よさに笑ひもしたのである。もう一度も二度もあへる機會を持ちたかつた。

七月二十九日　晴。早發、青海町に至り、舊任校青海校を訪ひ、舊情を温む。辭して歌外波村に向ふ。

清水圓治郎氏〔七七〕　歌部落の本陣の老人から教へてもらつた人だが、實は自分なども、昔少しは知つて居た人であつた。風呂屋の親爺で、風呂釜を前にして聞出すと、うまい事にはこれも同年のつれあひが、仲間になつてくれたが、やがてつまらぬ事をこまぐ〳〵と聞くこの客人にあいてか、ごろりと涼しい所へ行つてしまうた。此の親爺さんもやがて「そいがするのは他宗のもんだ」と言つて、此の村はモントばかりで、何もせん所だと、斷り續ける樣になつてしまつた。自分ももう何をか言はんやといふ心になつて、罐詰のからにオコゼを詰めて、風呂釜で黑燒をつくるのを、だまつて眺めて居たのである。

夕刻郡の西端市振驛に下車。市振校細井校長に挨拶、直に話者を訪ふ。一泊。

木原金次郎氏〔六〇〕　郵便局の机に向ひあひながら、次から次へと語つてはくれるのであ

るが、ごうも此の事務家の氏に、何時迄も語らせて居るのは氣の毒でたまらなかつた。「……ちやがえ」と言ふ言葉尻もなつかしく、よい傳承者でもあるので、夜分にでも再び訪ねようとしたが、傷痍の御令息がまだ靜かに病を養うて居ると聞いては、自分の厚顏もくだけるのであつた。此の村での採集の前途は暗くなつてしまつたが、瀧見館の宿と、宿の主人とを敎へてもらつて、埃の足をあげ、西日の中へ歩み去つたのである。そして忙しい宿の主人を捉へてみたが、是もモントであつたのは、詮もなかつた。

七月三十日　晴。早朝、峠を越えて、上路村に至り、舊友齋藤校長を訪ふ。早速話者を紹介してもらふ。

上原重吉氏〔七四〕　眞黑いヒヤマの下のキヤクジロに、うすべりを敷いて坐らせたはよいが、聞く事の誠にまづい事であつたのは、此の人もあきれたらしく、四十過ぎ恰好の娘さんが入つて來るまでは、話もよう思ひ出せなかつた。「若いもんに委せてしまうて、言ふ事も思ふ事もない、のんきになつてしまつた」と言ふのが、きまり文句であつた。此の老は若い時に家をとび

出して、町屋づたいをしたので、田舍へ歸るのは心外であつたが、親のたてた家だから仕方もなかつたと言ふ。やはり門徒だが、家の入口には〆繩のキリサゲも美しく、神棚も大きかつたのは、自分には誠に幸福であつた。

中食の後、荒澤部落をみて、越中の山村平へ出、青海町へ歸つて泊る。

七月三十一日　晴。青海川の上流、橋立部落を訪ふ。

武藤龍藏氏〔六七〕　舊い橋立部落のうちでも、最も舊い家であり、更に此の頑丈な老人も少し足が萎えて來て、何時も家に居ると言つたのは、自分のやうな仕事をもくろむ者には、有難かつたのである。つれあひが仲間になつてくれて、案外話はすゝんだが、ともすれば他の部落の變つた行事を、語らうとするのには、採訪時間のきりつめてある此の日程では、誠につらかつた。旅を語らうとする心を、あらぬ方へそらして、此の村の軒先へ立戻つてもらふのは、結局此

の家の門徒であることと共に、豐富な成績はもてなかつた。とうとう「行く先々で、刑事の調べるやうな事、言つとるがんでは、果てる仕事ぢやないの」と、逃げられてしまうたのである。

●

是をもつて一先づ打切り、母の膝下に歸つて足の埃を洗ふ。

八月十三日　晴。十日間の新潟に於ける合宿訓練を受終つて、漸く亡父の墓前に坐る事が出來た。同夜根知村字山寺の伯父を訪ふ。

青木恒吉氏〔七〇〕　自分の親身の伯父であるばかりでなく、此の方面でも、自分に多くの教を與へてくれた。ヤスノゴキを作つてくれたのも此の伯父であり、道祿神やオノ神ノ腰物を作つてくれたのも、やはり此の伯父だ。鳥追杵なども下して來てくれたのである。何しろ「ハダカ武兵衛」の札を、今時オートに貼つておく程の御仁である。私は時間を度外視する事が出來たら、もつと詳細な記憶をよびおこしてもらへたらうと、惜しい氣がして居るのである。

八月十四日　晴。早朝、小瀧村に向ふ。小學校は留守、漸く夏中部落の中村氏を訪ねあてる同夜實家へ歸る。

中村源吾氏〔八一〕　此の村の村長を、二度程もつとめた老人であり、村落や家の來歴などについては、極めて豐富且つ正確な知識を持つて居られたが、惜しい事に耳が少し早くはなかつた。そして、うるさい年中行事などの記憶が不確といふよりは、興味をもつて居ないと言つた形であつた。自分を憐んで、更にアラヤの婆さん中村フヂ女〔八四〕を紹介して下さつたが、この老女の「そんな事聞かんでもえゝないか」と言つて、さつさと臺所へ引上げたのには、何とも仕方がなかつたのである。

八月十五日　晴。早發、大野村に至り、小學校を訪ひ、青木綠郎先生の好意にすがる。

磯野敬次郎氏〔五一〕　役場の助役さんで、もう百姓もせぬと言つた上に、門徒である事が此の人に多くを語らせなかつた。それは止むを得ぬとしても、此の村の鄕土史については、造詣

を蓄積してゐる親切な御仁で、ドンドコサンなぞと言ふ祠を、案内もしてくれたのである。

直に大和川村に至り、山崎鄉土研究會長の斡旋により、不破野氏をつかまへる。

不破野由五郎氏〔五七〕　田伏の網元である此の人は、漁業については極めて詳しいもので遂には岩船の海府で、地引網の漁場を開拓して、すてきに儲けた話をしてくれた。かうした血の氣の多い御仁に、年中行事なぞと、古ぼけた事をきくのは、阿呆の骨頂と斷念して居たのであるが、きゝ出してみると、自分の豫想は見事に外れた。正確な知識と豊富な資料とは、親讓りかも知れぬが、此の人も亦「今の人は、何事も禮式なぞと言ふもんはない。尊ぶべきものは、尊ばねばいかん」といふのであつた。

八月十六日　晴。磯部村字仙納に至る。仙納校の田中フジエ先生の案内を受け、安田校長紹介の老人に會ふ。

伊藤市藏氏〔六五〕　訪ねる人が、口が重くて、耳が遠いなぞと言はれては、誠に浮ばれない氣がするのであるが、とびきりの老人ばかりを目あてにする自分なぞの、常に覺悟せねばならぬ所であつた。この老人も少々不快だといつて、暗い納戸から出て來た程ではあつたが、その息子さんや、七十二歳の伊藤司老なぞも、一つ爐傍に坐つてくれたお蔭で、ぞうやら一通りの採集が出來たのは、嬉しい限りであつた。その上幾つかの新しいことを、拾ひ得たのは、無上の喜であつた。

歸途、漁村筒石を見、雁田サンに賽し、名立町に至る。夕刻有名な茶屋ヶ原のオンバサンに參り、夜沼川氏に聽く。

沼川八造氏〔六〇〕　旅館大文字屋の亭主がみつけてくれた、此の町の氏子總代をして居る人である。じこたま文書を持つて來たが、私の聞かうとする事は、その中には皆目なく、さぞ力拔けのしたことでもあらう。お氣の毒であつた。殆どその生涯を、この町の敎育の爲に捧げた方で、敎育者であつた事と、家が門徒であつた事とは、多くのたわいもない年中行事を語るには、むづかしかつた。此の人には、他の鄉土研究で、もう一度も二度も、力を借りる日があらうと思

つて、袂を別つたことである。

八月十七日　晴。早發、下名立谷に至り、花溪先生の好意を受けて、濁澤に上る。

齊京鶴松氏〔七一〕　お盆の十七日だが、そろ〳〵俳編でもしようかと言ふ所へ、自分は推參したのである。しかも先年この老の後嗣虎千代氏に、役場で口碑傳說をきいた因緣が、唯一の手がかりであつた。が、快く私の質問に對へてくれたのみか、次から次へと、意のある所を汲んで、記憶をよび起しては、語りついでくれたのは、誠に嬉しいことであつた。更に次の老女を加へる事によつて、文字通り有終の美をなしたのである。

竹田セン女〔五七〕　折からヂロバタの嫁座敷で、お茶をのんで居た人で、ちよい〳〵答の補足をしてくれるが、誠によい語り口なので、期待をして居た。所が、途中で逃げられてしまうて、一時惜しい氣がした。强つて、もう一度座へもごつてもらつて、採集をつゞける事の出來たのは、幸であつた。もう何もないのうと言ふ口の下から、まだかういふ事もあると言つては、續

續とつけ足すのがこの人の嬉しい癖であつた。今度の採集では、最も充實した、しかも特異なものを多く得る事が出來たのは、最後であるだけに一入樂しいものがあつた。

峠を越えて、中頸城郡桑取村に出る。休む暇なく歩いて、谷滑驛より乘車、一路新潟に向ふ。荒海の彼方に、佐渡ヶ島を望みながら、前後十數日に亘る、採訪旅行の思ひ出にふける。

〔昭和十四年夏記〕

語彙索引

ア

アカメノ木……（三九）
秋夷譯……（七六）
アキゴト……一三五
アキノ方……（一一・一四・二一・二三）
秋舟……（一三九）
秋振舞……（一三五）
アキ山……（三八）
アキワコウ……一七一
麻……（二〇・一〇二）
アサイワイ……一六
アシアライガイ……一一五
アヅキガユ……五三（二九・三二・三三・四七・五〇・五二・七五・七六・一四二・一五五）
小豆飯……（八三・八四）
小豆餅……（一五八・一六一）
アヅキヤキ……五八
アトセチ……三
姉サオトリコシ……（一三六）
甘酒……（八八・八九）
アマザケマツリ……一二八
甘茶……（九三）
アミダコウ……一七二
洗イ米……（一二九・一三〇）
アラクリカキ……五二
アラシヨウガツ……一五四
アラジヨウレイ……一一四
アラビ……一二（二四）
粟刈……（四三）
アワセ竹……（七四）
アワボ……四三

イ・ヰ

イサミ竹……（七四）
石場カチノ歌……（三五）
伊勢譯……（九六）
一バセチ……（三）
一ノ戸ヲソソク……（一五）
イチノヒレ……一六二
一ノ筆……（一五・二一）
イチモウデ……一四
一把藥……（七〇）
イツキノ木……（三九）
イナリマツリ……八一
イネカリ……四四
稻刈鎌……（一三二）
稻扱……（四四）
稻スガイ……（二〇）
稻ノ葉……（四五）
イネノハナ……四三（四七）
イノコ……一三三
芋三日……（一二六）
イモノトシトリ……一二六
芋蒲月……（一二六）

イモメイゲツ……一二六
炒菓子……（八八）
イワイビ……一

ウ

ウサギノネンゴ……八四
ウシウマノトシトリ……一六八
丑ノ日……（一〇五）
ウスノヒキソメ……二一
ウツギ……（三九）
卯月八日……（九二）
ウデボヤ……（一二五）
ウミセガケ……九八
ウミソミ……二〇
裏盆……（一二〇）
賣初……（二一）

エ・ヱ

エト當リ……（八）
夷祭……（一〇〇）
エベスコ……一三三

オ・ヲ

オイセノタウエ……九六（九七）
オイベスサンノサカナ……（一六二）
大麻……（一六九）
大塞ノ神……（六九）
オウシヨウガツ……五
オウスハキ……一五三
オウトシ……六
オウドシトリ……六
オオトシノメシ……二五
大年ノ祓……（一六九）
大火……（四一・六八・一六八）
大舟小舟……（三七）
大盆……（一二〇）
オエダ……（五五）
オカイバン……（一七二）
オカカチ……九〇
オカザリ……一五八（五三）
オカラコ……（九二・一二二）
オクリ團子……（一一八）
オクリヂヨウチン……一一九
オコウサン……一七一
オコモリ……一六九
オコワ……（八一）
オ悟リ粥……（一四二）
オザシ……一六三
オシギリ……（五三）
オシ祭……（九九）
押餅……（一五八）
オジヤ……（一〇・二五）
オジヨウザ……一四二
オシヨライゴモ……一一〇
オシヨライダナ……一一〇
オ精靈花……（一一二）
オシヨライムカエ……一一四
オスストリ……一三〇
オセンマイ……（三八）
尾頭附……（一）

オソナエ……（一五八）
オ田植……（五五）
オタチ……（五三）
オタチビ……一一八
オタツバイ……（三六・七六）
オタナマイリ……一一七
オタネ……（一二八）
オツイタチ……一四（二四）
オツモン……（一八）
オ寺ノ年始……（一七）
オテンノサン……一〇四
男ノ節供……（九四）
乙節供……（一二八）
オトリコシ……一三六
麻苗代……（一〇二）
オニウチマメ……八〇
オニハライ……四六
オネントウ……一六五
オハギ……（一〇四・一二七・一三二）
オバジョ……（六二）
オハツホ……一五
オバナマツリ……一二一
オ彼岸……（八六）
オ日待……（二六）
オマツ……一五一
オマツガミ……一五二
オマツサンノトシトリ……一四八
オマツサンワライ……六九
オマツハヤシ……一四九
オマンドサン……（九八）
オミオク……（一五）
オモケモケ……四九
オモリサン……七〇
オヤク……（一二二）
オ薬師サン……（九三）
オ夜食……（一一四・一一六）
オヤスノゴケ……（九）
オヤダスケ……一二七
オヨリコウ……一七二
オリメ……一
オロシ餅……（一五八）
オワン……一〇
女神……（八八）
女衆ノ祭……（八二）
女節供……（八八）
オンナノネンシ……一七
オンビラ……一五二（六八）

カ

買初……（二一）
カイモチ……（一三二）
カイモチマツリ……八七
カイレイ……一六
カカセアゲ……一三一
カカセマツリ……一三二（一四〇）
カガミナオシ……二四
鑑樣……（一四）
カキソメ……二一（六八）
カキモチカミ……一〇一
カキモライ……一八

カケイヲ……一六二
カケソバ……一一〇
カケトリ……一六七
カコ……（三五）
カザマツリ……一二二（一二一）
カザリ竹……（七三）
カチキ……（五五）
勝栗……（一八）
カツノ木……（三九・四三・四七・四九・五一・五四・六六・七〇）
カツボ……（九四・一一〇）
桂……（三八・四七・四八）
カドイリ……（一七）
カドマツ……一四九
蚊ノ口焼キ……（四五・六七）
南瓜……（一一一・一三九）
カミオクリ……一二九
神サンノオタチ……（一二九）
神サンノ辨當……（一二九）
カミツカエ……八
カミノカリアゲ……（一二九）
神ノキヨウジ……（八）
カミノトシコシ……二八
神マカナイ……（八・一六）
カミムカエ……一三〇
カミモライ……四九
榧……（一八・二五・三九・六七）
ガヤノキ……四五（七五）
萱ノ穂……（一二一）
カヤバシ……一二二八九七
カヤモチ……一二二
粥……（二五・五六）
鳥……（一〇・五一）
カラツコ餅……（一三三）
カリアゲ……一三二
川流レ祭……（一〇〇）
カワフタリ……一四〇
カワマツリ……一〇〇
變リ物……（一・八一）
寒アキ……（一五一）
カンキヨウ……（八二）
カンクノミズ……一二
カンダメシ……六〇
カンネンブツ……一七三
カンノンコウ……一七二

キ

キ……一五〇
キイヂメ……五〇
ギオン……一〇四
黄粉……（九七）
黍殼……（一三）
キリキリ山……（一六一）
キリコ……一一二
キリサゲ……（一五〇・一五二）
桐ノ葉……（一一〇・一一六・一一九）
切リ餅……（一五八）
キワダノ木……（四三）
キンヌギ……一〇二

ク

クイシメダンゴ……一四一
クイツチョ……（九五）
クイツメ……（一八）
九月九日……（一二八）
串柿……（一六・一八・二三・三八・一四二・一五八）
クシモチ……七三（五四）
薬合セ……（九二）
具足……（二一）
口覘……（一八）
クチヤキ……六七
クドマツリ……五六
クビククリダンゴ……一五六
クビクサ……（一二四）
クモチ……一五七
クラビラキ……三二
栗……（一六・二五・三九・四八・六八・八一・一四二・一五八・一六三）
クリノキノツエ……一三八
クリノキバシ……四八
栗名月……（一二六）
クルマヤマツリ……一四〇
クルミ……（三九）
胡桃ノ木……（四三・四五・五九・七〇）
クレカンジョウ……（一一六）
黒豆……（一八）
クロモヂ……（三九）
桑……（一〇三）

ケ

削リ掛ケ……（五九）
削リ掛ケノ太箸……（四七）
ケズリバシ……四七
削リ花……（四七）
欅……（三九）
ケンサイ飯……（八六）

コ

コイバシアゲ……一三五
コウシンコウ……一七一
合同年始……（一四・一七）
弘法サン水……（一一一）
コウリトリ……一七〇
コウリヤクヨビ……一三五
コエクバリ……五二
ゴカイホメ……（二八）
コガイホメ……（二八）
五月五日……（九四）
ゴガツノセツク……九四
黄金千杯朱千杯……（一二）
ゴキヨウ……九
ゴケ……（九）
ゴケワン……一〇
コザイノカミ……六九
コシキ……（一四〇）
コジキシヨガツ……七五

コシモン……七一
コシヨウガツ……五
ゴゼサン……（九〇）
五節供……（二九）
ゴゼンザカナ……一六三
コドシ……六
コドシトリ……六
コドシバライ……六（一六七）
子供ノ塞ノ神……（六九）
コヒキアゲ……一四〇
コボン……一二〇
胡麻味噌……（八〇・一一六）
ゴマサン……一四三（一四二）
米搗ジマイ……（一五四）
米ノ花……（四三）
御來迎……（一二二）
蒟蒻……（一六四・一六九）
金比羅サン……（九九）

サ

賽銭……（七三）
災難除……（二七）
サイノカミ……六八（二一）
サイノカミノヒ……七二
サイノカミノボボ……七〇
サイノカミノモチ……（七三）
サイノカミノワラ……六九
榊……（一三〇・一五一）
サク……（四三）
ササマキ……（九四）
ササモチ……一一七（九七・一一一・一二四）
佐渡ケ島……（六三）
猿ガバンバ……（六四）
サンガイマツ……一四八
三月ノオ節供……（八八）
サンガニチ……二四（一一二）
サンジツ……（九七）
サンセツク……一二八
桟俵……（七九・八一・八三）
三寶荒神……（二六）

シ

十月十日……（一三一）
ジウゴヤ……一二四
ジウゴンチノカユ……五八（四三）
ジウサヤダンゴ……一二六
ジウサンガツ……四六（四五）
ジウサンチトシトリ……一四八
十三夜……（一二六）
ジウニガツ……四五
ジウヨツカトシコシ……四〇
十六羅漢……（八七）
塩……（一三八・一五七）
シオバナ……一二
四月八日……（九二）
シゴトハジメ……二〇（三一）
ジシヤガラ……（三八）
シソメ……二〇
死損破損……（七五）

シデノ木……（三九）
シナノトシトリ……八〇
死葬禮……（二二）
シホノギ……（一一二）
シマイショウガツ……七五
シマイセック……一二八
シメナワ……一五一
シヤカノコツ……八五
シユツセイザカナ……一六二
ショウガツサマ……一六一
ショウガツジマイ……一〇二（七五）
正月禮……（一七）
ジョウサイ……一二七
ジョウザ……八六
ショウタメ……（五一・九七）
ジョウドウエ……一四二
ショウバイハジメ……二一
菖蒲……（九四）
ショウブユ……九五
ジョウヤ柱……（三七）
ショウライダンゴ……一一五
ショウリョウオクリ……一一八
精靈花……（一一一）
シロカキ……五二
白餅……（一二二）
師走一日……（一四〇）
師走八日……（一四七）
シワスワスレ……一四一
シンボク……（六八）
新盆……（一一四）
芯松……（一四九）

ス

水神サン……（九九）
スガイ……（五四）
スガイホウヅ……一二四
杉……（一五一）
ススオトコ……一五四
ススト……一五三
ススハキ……一五三
ススネコ……一五四
ススモチ……一五四
スヂ……（六七・八六）
スマノアネサ……（一六九）
炭……（一〇）
擂粉木……（七九・八〇）
擂鉢……（一二四）

セ

セイボ……一六四
セイボガエシ……一六四
セイボマイリ……一六九
セイボヨビ……一六五（三）
赤飯……（九二・九七・一〇一・一〇四・一一六・一三七）
セチ……一（七五）
セチカエシ……四
セチモチ……二
セチヨビ……三
セツクハジメ……二九

セツブン……八〇
節分ノ年取……（八〇）
錢ザシ……（二〇）
センザイロク……一〇五
ゼンボウジマツリ……九九
洗米……（一一六）
ゼンマイ……（一五八）

ソ

雜炊……（二五）
雜煮……（二四・七五・七六・七七・八九・一一七）
ソウヒマチ……一七三
蕎麥……（一八・五三・一三五・一五四・一七三）

タ

タイエアガリ……九七
ダイコクジメ……一五二
ダイコンノトシトリ……一三三
ダイシコ……一三七
ダイシコアレ……一三七
タイシコウ……一三八
大師講蕎麥……（一三八）
ダイシコダンゴ……一三八
橙々……（一八）
ダイドコロマツ……一五〇
太陽サン……（二六）
ダイラ殿……（六五）
ダイロズイ……一〇二
タウエ……五四
タウチ……五三
タカノカミ……二五
タカミ……（九七）
薪……（二五）
竹……（六八・六九・七三・一〇六・一一〇・一一二・一四九）
タケノカラカイ……七三
タチオド……（五一）
タチワ……（一一八）
ダチン……一六四
タツパイ……（一〇・三六）
タナバタ……一〇六
タナバタナガシ……一〇七
タナバタノウタ……一〇七
タナバタノカザリヅナ……一〇六
田ノ神……（九七・一三一）
タノクサトリ……五四
足袋……（一八）
タヨサン……（七〇）
タヨヒマチ……二六
櫛ノ木……（四五）
團子始メ……（七八・一六〇）
ダンゴマキ……八五

チ

中日團子……（八七）
智慧團子……（八五）
爺サオトリコシ……（一三六）

チボタマ……（一六九）
チマキ……（九四）
茶……（一八）
チヤゴト……八九
帳祝……（三三）
チヨウメンイワイ……三三
チンガドンガ……（八五）

ツ

月見ノ祝……（一二六）
ツギボボ……一〇六
ツキミノモチ……一二四
月休……（九七）
ツグムリバライ……七八
附木……（四六）
ツゴモリ……（七八）
ツタ……一五一
ツツガユ……五六
ツツジノ花……（九三）
ツナウチ……八二
ツナギ栗……（二五）
椿……（九〇）
ツムグリダンゴ……七八
ツモン……一八

テ

デイリハジメ……三三
手打蕎麥……（一六）
デクサマ……一六三（七〇）
デクノ木……（四七）
デツメ……二一
テツペ……（一三二）
手拭……（一八・一六四・一七〇）
テラネンシ……一七
テラヒマチ……二六
寺參リ……（一五）
テンキダメシ……五九
テングマツリ……八三
テンタロ……（一二三）
テントサン……（二六・八六）
天福……（八五）
デンボダイシ……（一三七）
テンジンイワイ……七七
天神經……（七七）
テンジンコウ……七七
テンジンマツリ……七七

ト

トウカンヤ……一三一
ドウグノトシトリ……一六九
トウジ……一三九
唐土ノ鳥……（二九）
トウビヤイサ……一四三
ドウロクジン……七〇
トウロゾロイ……一一九
齋木……（二〇）
年祝……（一六七）
トシオトコ……八（一〇・二五・七九・一四八・一六九・一七〇）

トシオトコノコ……九
トシガミサン……一五九（五一・一六八）
年ガワリ……（一一）
トシコシ……五（二八）
ドシコシノヨ……二八
トシダナ……一六〇
トシダマ……一六五（一七）
トシトクサン……一六〇
トシトリザカナ……一六七
トシトリゼン（年取錢）……一六五
トシトリゼン（手取膳）……一六七
年取直シ……（四一）
トシノイチ……一五四
トシノセ……（二八）
トシヤ……（一六八）
トシヤド……一六一
栃餅……（一六一）
トモ綱……（三七）
ドヨウ……一〇五
トリオイギネ……六六
トリ初……（二〇）
トリボイ……六一
トリボイウタ……六一（八四）

ナ

ナイソメ……二〇
ナエトリ……五四
中ノ節供……（一二八）
茄子……（一一一・一一六）
ナゾロ……二九
夏大根……（一一一）
七草……（二八・一五六）
ナナクサショウガツ……二八
七日正月……（二八）
ナヌカセツク……一〇八
七日松……（二四）
楢……（三八・四六・六八）
ナリモノ祭……（五〇）
ナリワイ……（五一）
縄……（二〇）
ナワシロ……五一
ナワシロジメ……五二
南天ノ葉……（一一一）

ニ

ニヲツミ……五五
二月九日……（八二）
二十四日講……（二九）
日天樣……（二六）
ニバセチ……三
鯡……（一六八）

ヌ

ヌイゴ……（一二・八九）
縫初……（二〇）
ヌイダ……（四七）
ヌカ……（六七）
ヌルデ……（三九・四六・四九・五九・六六）

ネ

ネズミノトシトリ……一六八
ネダ……（一二四）
ネボン……一一九
ネムノ木……（三九）
年始……（一五・一八）
ネンシザケ……一八
年始シマイ……（四）
年始マワリ……（一六）
年始招ビ……一八（三）

ノ

能生市……（一五四）
ノシ餅……（二・一五八）
ノトヤマブシ……（三五）
ノノサン……（八六・一四〇）
ノボリ旗……（九四）
ノボリマツ……一四九
野休……（五五）
ノヤスミセック……九七

ハ

婆サオトリコシ……（一三六）
糊ボ……（一三八）
ハカソウジ……一〇八
ハガタメ……一六
ハカマイリ……一一六
萩ノ花……（一二一）
バクチ……（一六九）
箸ノ花……（四七）
ハシヤキ……五九（四七）
蓮ノ葉……（一一〇）
蓮ノ花……（一一二）
裸參リ……（一七〇）
八十八夜ノ別レ霜……（一〇二）
ハチジョウサマ……一五一
ハツイチ……三三
ハツウマ……八一
ハツエベス……七六
ハツオトキ……（一八）
初顔……（七六）
ハツカショウガツ……七五
二十日盆……（一二〇）
ハツキ豆……（一三）
ハツクチ……一五
ハツゴエ……二二（一五）
ハツサクノツイタチ……一二一
初集會……（二六）
ハツセイボ……一六四
ハツゼチイワイ……二
ハツゼック……八九・九四（一二六）
ハツテンジン……七六
初穂……（一〇四・一二五）
初盆……（一一四）
ハツマイリ……一五（一四）
ハツミズ……一二
ハツモウデ……一四
ハツヤマ……三九
初山ノ固餅……（四〇）

ハツユメ……二二
ハツヨリアイ……二六
ハテ岸……（八六）
ハナ……（四二）
ハナイレ……（四〇）
ハナトリザワ……（四七）
ハナノ木……（三八）
ハナバシ……四七
ハナマツリ……九二
ハナミ……八九
濱施餓鬼……（九八）
ハママツリ……九八
ハリセンボ……一四七
ハリセンボダンゴ……一四七
春兎講……（七六）
春事……（一三六）
春駒……七五
ハルノキ……（六八）
春寄合……（一八）
バンドリ……（一二四）

ヒ

火打石……（一五七）
ヒガン……八六
ヒガンダンゴ……八七
ヒガンマイリ……八六
ピク……一〇
膝節……（一〇一）
菱形餅……（八八）
菱餅……（八八）
ビシヤ……八四
七月七日……（一〇四）
一日餅……（三六・一七〇）
ヒトガタバライ……一七三
一人招キ……（一三六）
ヒナアサバ……八九
ヒナゼック……八八
百姓道具……（五一・五三）
ビンゴサンゴ……九〇

フ

福俵……（二八）
フクデ……一五七（一五・二一・三二・三五・三六・一四〇・一五八・一六四）
フクノカミ……七一・一六八
福豆……（八〇）
フシノ木……（七二）
フジョウビ……二六
二日正月……（三・二四）
太ジメ……（一五二）
フナイワイ……三三
フナダマサン……三五
舟靈樣ノ年取……（三四）
舟靈サンノオ正月……（三四）
フナダママツリ……三六
フナマツリ……九九
フネノトシトリ……三四
鮒……（一六七）

へ

ヘーナノバン……(八九)
ヘーノリ……(三四)
ヘイナモチ……八八
ベトビナ……(八八)
ヘビヨケ……六七(八五)

ホ

箒……(二四)
ホウクニン……一五五
疱瘡……(七〇)
ホウダラノ木……(一五〇)
ホウヅキ……一九(一一一)
ホウトウ蕎麥……(三三)
豐年……(九・四二・五八・一四七)
朴ノ葉……(九七)
寶引……(三五・一六九)
ホクソ……(三六)
干鰯……(八一・一六二)
牡丹餅……(八七・九四・一〇三・一一四・一二九・一三〇・一三五)
ボタ餅祭……(八四)
ホトケノツエ……一一二
ホネツギ……一〇一
穗花祭……(一二一)
ボンイチ……一一二
ボンオドリ……(一一九)
ボンカンヂヨウ……一一六
ボングサ……一一六
ホンコサン……一四二
ボンジマイ……一二〇
盆棚……(一一〇)
ボンバナ……一一二(一一一)
ボンマイリ……一一四
ボンミチツクリ……一〇八
ボンヨビ……一一七

マ

マイダマ……四二(五・四〇・四一・七五)
マイダンゴ……(四二)
マイネリ……四三
マゲツトツコ……(一)
桝……(一五八)
マダラ……(三四)
マツオサメ……二三
マツオロシ……二三
マツカザリ……一五〇
マツナガシ……二三
マツムカエ……一四八
俎……(二五)
マノマツリ……一七三
豆炒……(一〇一・一二九・一三〇・一四二・一七二)
豆殼……(一三・八〇・一五二)
マメマキ……七九
豆餅……(二・一六・三八・一五八)
マユカキ……四二

マルメモン……(一三一)
丸餅……(一二四)
マンカン……(五三)
マンゾウ……(一四三)
マンドマツリ……九九

ミ

ミイワイ……一七三
蜜柑……(一五八)
ミソカソバ……一六八
ミソハギ……(一一二)
味噌豆……(八九)
三日正月……(二四)
ミツカゾロ……二五
ミツカマツ……二四
ミヅクサ……(三九・六六・六八)
ミヅサゲマツリ……一〇〇
ミヅノコ……一一一
ミヅムケ……一一一
ミヤゲダンゴ……一一八
宮參リ……(一四)

ム

ムイカマツ……二三
ムカエヂヨウチン……一一五
ムカジ除ケ……(六七)
ムクロオイ……六六
ムコノナベカレ……二
棟内……(一六)

メ

メミエ……一五六

モ

モチツキ……一五七
モチナカサイ……三〇
モチニ……八九
モツソウ……(八一)
モノツミ……(一八)
モミヂノ木……(三八)

ヤ

ヤイト……(一二四)
家内……(一六)
ヤキモチ……(八三)
ヤクシサン……九二
ヤクジンヨケ……四六(二六)
厄年……(二六・六八・七三)
ヤクビ……八二
ヤクヨケ……四五・一七〇(四六・八〇)
燒病……(一〇八)
彌三郎婆サ……(四六)
ヤスノゴキ……九
ヤツサヤツサ……一二九
柳……(一一〇)
ヤナギノハシ……一一二
ヤネフキ……九四
ヤブイリ……五四(三・一二〇)
山……(四〇)

ヤマアソビ……九〇
ヤマイリ……四〇
ヤマダノオロチ……（一五八）
ヤマトバサミ……（七九）
ヤマノカミ……八二（八四）
ヤマノカミダンゴ……八三
ヤマノカミノヨイダシ……八二
ヤママツリ……八四

ユ

柚子……（一五八）
譲葉……（一一・一四九）

ヨ

ヨイゼック……二八（九四）
横槌……（六六）
葦……（五六）
四ツ道……（八〇）
ヨノミノ木……（三九）
ヨメイワイ……四八
ヨメゴト……九〇
ヨメタタキボウ……四八
蓬……（九四・一一一）
ヨモギノ餅……（八八）

リ

立春……（七九）
立春大吉……（一七）
リヨウゴン様……（三六・三七）
漁縄……（二〇）
リヨウマツリ……九九

ル

ルスミマイ……一一六

レ

レイヨケ……一七

ロ

六月一日……（一〇一）

ワ

若イ衆オ講……（一七二）
若イ衆オトリコシ……（一三六）
若イ衆祭……（一〇五）
ワカオケ……一〇
ワカギ……三八（七五）
ワカキタキ……四一
ワカギムカエ……三八
ワカミズ……一一（一六・二四）
ワカモチ……四〇（一六九）
ワジメ……一五二
綿糸……（二〇）
藁……（一五七）
藁仕事……（二〇）
藁ノ籠……（一〇）

—完—

昭和十六年十一月五日印刷
昭和十六年十一月十日發行

(停)定價八十錢

編輯兼發行者　新潟縣西頸城郡糸魚川町　西頸城郡鄉土研究會　代表者　山崎甚一郎

印刷者　新潟市西大畑町五二九二　大橋幸雄

發行所　新潟縣西頸城郡糸魚川町糸魚川國民學校內　西頸城郡鄉土研究會

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

919
295

IH2B-68